

洋16-134 (ショートコメント)

「ある天文学者の恋文」

☆☆☆

2016 (平成28) 年9月25日鑑賞<TOHO
シネマズ西宮OS>

監督：ジュゼッペ・トルナトーレ

音楽：エンニオ・モリコーネ

エドワード・フィーラム (大学教授、天文学者) / ジェレミー・アイアンズ

エイミー・ライアン (天文学を学ぶ女子大生) / オルガ・キュリレンコ

ヴィクトリア (エドの娘) / ショーナ・マクドナルド

オッタヴィオ (サン・ジュリオ島の舟乗り) / パオロ・カラブレージ

アンジェラ (エドとエイミーのことをよく知る女性) / アンナ・サヴァ

エイミーの母親 / イリーナ・カラ

2016年・イタリア映画・122分

配給 / ギャガ

◆本作は、かつて『ニュー・シネマ・パラダイス』(88年)、近時は『鑑定士と顔のない依頼人』(13年) (『シネマルーム32』194頁参照) という名作を監督したイタリアの巨匠ジュゼッペ・トルナトーレが「ついに男女の愛に切り込んだ」という最新作だから、こりゃ必見!

さらに、著名な大学の天文学者エドワード・フィーラム (ジェレミー・アイアンズ) と秘密で年の差の愛を育んでいる女子大生エイミー・ライアンを演じるのは、『007/慰めの報酬』(08年) (『シネマルーム22』88頁参照) でポンドガールを演じたオルガ・キュリレンコだから、その意味でも必見! そう思ったが……。

◆本作の原題は「文通」というシンプルなもの。毎日のようにメールやチャットそしてスカイプで愛情を確認し合う2人だが、ある日エイミーが出席した講義で、エドの代役の教授から突然のエドの訃報が伝えられたから、エイミーはビックリ。だって、さっきまでスカイプでエドの顔を見ながら話していたじゃないの!

さらに、公式にエドの死亡が確認され、葬儀が終わった後も、毎日のようにエイミーの部屋にはエドから何らかの贈り物が届けられ、封筒に入っていたディスクを開けるとそこにはエイミーに向かって愛の言葉を語りかけるエドの姿が。こりゃ一体ナニ……?

◆本作冒頭には、ホテルの部屋の中でのちょっとしたラブシーンがあるが、それを観ていると、朝出かける前だけに時間がないこともあって中途半端なまま。そのうえ年の差が顕著なだけに、この先生ホントにこんな女子大生とエッチできるの? とつい心配になってしまう。それはともかく、本作は典型的な「不倫モノ」だが、ベッドシーン(?) はこれだけで、あとは著名な天文学者の男と天文学者の卵の女性との恋だけにその手の美しい言葉を散りばめたメールとディスクのやりとりばかりだ。昔は手書きのラブレターしか恋心の伝達方法はなかったが、今の情報伝達機器はここまで進歩していることにあらためてビックリ! しかし、著名な天文学者とはいえ70歳前後のエドがなぜこんなにハイテク機器に強いうえ、なぜそんなものを駆使して恋心を伝えているの? そこらが全くわからないから、途中から白けてくることに……。

◆日本でも成年後見の制度が活用されているが、そこでは不祥事を含めてさまざまな問題点があるうえ、成年後見人がホントに任務に忠実に動いているのかどうかポイントになる。しかし本作を観ていると、何とも手の込んだエドの愛のメッセージの伝達方法を処理する脇役たちの仕事の遂行ぶりは完璧。しかし、それはあくまでエドとの契約にもとづくもので、なぜそうなっているのかはエイミーには全くわからないから、そんな戸惑いの中で振り回されるエイミーの姿を見ていると、私たち観客もついイライラ。

それにしても、エドはなぜこんな手の込んだ愛情表現の方法を……? それが本作最大のポイントだから、ストーリー展開に沿ってその解明を進めながら、エドの恋心の深さに思いを巡らせたい。

2016

(平成28) 年9月30日記